



まさかの百歳時代

岡田 安弘

この世は思いもよらぬ事に満ちている。「人生百歳時代」も一例だ。20年学び、40年働く。「残る20年は楽しむ」と目論む。ところが、さらに20年も寿命が延びるかもしれない。どうする? 「百まで生きる覚悟」と題した講演会があるのを知った。新型コロナウイルスが飛来する前のことだ。

講師の春日キスヨ・元松山大教授(臨床社会学)が冒頭に尋ねた。「人類が経験したことのない百歳時代が迫っている。皆さんは何歳まで生きるとお考えですか?」。高齢者集会の度に質問するそうだ。多くは「考えてない」と言う。要するに成り行き任せ。正直な反応だと思う。

一人の男性が「80の前半でオサラバしたい」と発言した。講師は「10年先かもしれないのですよ。身じまいには発想の転換が必要です」と諭す。

「身じまい」。語感の清々しさが心に残る。古い支度の「終活」は騒がしい気がする。葬儀社の宣伝文句にも使われている。ヨガの精神の「断捨離」は欧州でも流行しているが、やはり日本人には「身じまい」が似合う。文化の香りがする。健康に感謝する気にもなる。

何故か、小樽の酒亭の女将、末岡睦(むつみ)さんの顔が浮かんだ。平成最後の4月30日、93年の生涯を閉じた。小樽運河埋め立ての反対運動で先頭に立つ。社会派女将で知られた。日本山岳会の最高齢会員。俳人でもある。

全日本スキー選手権・少年の部優勝。出場予定の札幌五輪は戦争激化で中止。70歳まではマッキンレーなどの高峰に何回も挑む。80歳を過ぎてマッターホルンをスキーで滑り降りた。

友人が北海道勤務以来、女将と交流を続けてきた。彼が出演する合唱コンサートを聴くために京都に来られた時、紹介を受ける。

小柄な90歳。考えがあつてのことだろう、独り暮らし。髪型も装いも飾り気はない。それでいて、きらめくような雰囲気を持ち主だ。終演後、居酒屋で談笑に付き合ってもらった。長女が気遣って「京都まで同行しようか」と言うので「お節介はよしなさい」と叱ったそうだ。

久しぶりに長女が小樽を訪問。母は床に伏していた。「高窓を拭くために乗った椅子から落ちた」と言う。ほどなく急死。「元気すぎるのも考え物だね」。友人は悔しそうに話した。葬儀を終えた長女からの電話で、椅子から転落は作り話、実は腹膜腫瘍と知る。

元気すぎが悪い訳ではない。そこが難しいと講演で学んだ。避けがたい事なのだ。今や少子化、シングル志向。講師は「家庭の姿が変わった。子供とその連れ合いは半ば他人」と言い切る。かつて家族が担っていた役割を誰がするのか。「それは皆さんです」と会場を指さす。「寿命観も家族観も変えてください。時代の変化を自覚して身じまいを始めてほしい」と講演を締めくくる。

手元にメモがある。「食事と運動の次に大切なのは、日課を予定どおり果たすこと。積極的に人と交流し役割を持つこと」と書いている。

予想もしなかった超の付く長生き時代。身じまいは、片付けることではない。誰かが何とかしてくれる事でもない。暮らしの再設計が否応なしに迫っている。「元気なうちに軌道修正できるようにしてください」。講師の言葉が頭から離れない。

飛沫警戒

小生、80歳になってヘルペスで脇腹に水膨れ。感染症だ。医師いわく、免疫力の衰えですな。コロナウイルスの飛沫警戒心、いや増す。

▽

▽

『疲労つもりで引き出ししヘルペスなりといふ、八十年生きれば そりゃあなた』(斎藤史)。明治の歌人に慰められる。